

アメリカザリガニ駆除でよみがえった水草たち

Eco～る∞KEIHO・NPO 法人ニッポンバラタナゴ高安研究会 馬場雄司

Eco～る∞KEIHO 山田莉音・楠本周平・伊藤颯亮・高田正剛・平才未来・柴田一志・小柳歩叶・梅澤敏稔・谷岡俊吾

1. はじめに

ニッポンバラタナゴ *Rhodeus ocellatus kurumeus* はコイ科タナゴ亜科に属し、大阪府八尾市、香川県東讃岐地区、九州北部、奈良県の一部のみに生息する小型淡水魚である。繁殖期には、婚姻色がオスにあらわれ、メスは産卵管が伸びる。近年、外来種であるタイリクバラタナゴによる交雑により、生息数が減少し、絶滅危惧種 I A 類に指定されている¹⁾。大阪府の八尾市では、NPO 法人ニッポンバラタナゴ高安研究会をはじめとして、地元の学生、地域住民たちが協力し、保全を行っている。

ニッポンバラタナゴは、二枚貝に産卵する特徴を持つ。アメリカザリガニは、タナゴの産卵床である二枚貝に何かしらの悪影響を与えていることが考えられる。シナイモツゴ郷の会から連続駆除装置を提供して頂き、2019 年の 5 月からニッポンバラタナゴが生息する池で、アメリカザリガニの駆除を実施した。本報告では、ニッポンバラタナゴ保護池におけるアメリカザリガニの駆除と水草の関係について報告する。

2. 調査地

八尾市のニッポンバラタナゴが生息するため池で実施した。保護池(通称ホンマ池)は、面積約 232m²の灌漑用の谷池である。なお、ニッポンバラタナゴ保護の観点から、詳細な場所は明記しない。

3. 方法

連続駆除装置を用いて 2019 年 5 月から現在まで、月 1 から 2 回(気温の上がる 8・9 月は月に 2 回)実施した。エサは、ドックフードを用い、エサの交換は調査時に行った。調査の際、成熟雄(雄)、成熟雌(雌)、幼体大(全長 60mm 以上の未成熟雌雄)、幼体小(全長 60mm 未満)に区分して個体数計数を行った²⁾。また、2019 年度は月 1 回、2020 年度以降は毎回頭胸甲長を測定した。

4. 結論

連続駆除装置 1 装置あたりの月別捕獲数は、2019 年 6 月に 49.3 個体を記録したものの、その後、捕獲される数は減少し、2020 年 1 月から 2021 年 8 月まで、1 装置あたりの月別捕獲数は、1.0 個体を下回った。その後、2021 年 9 月から少しずつ捕獲数は増加し、2022 年 8 月には 1 装置あたりの月別捕獲数は 16.0 個体を記録した。

平均頭胸甲長は、雌雄ともに 2019 年 5 月に最大値を示し、それぞれ 42.2、40.4 となった。その後、平均頭胸甲長は減少したものの、2021 年 9 月から平均頭胸甲長は上昇し、2022 年 6 月の平均頭胸甲長は、40.8 を記録した。

ヒシやエビモなどの水草は、アメリカザリガニの捕獲数が減少した 2020 年 6 月以降、毎年確認されている。連続駆除装置には、アメリカザリガニのほかに、シマヒレヨシノボリ、ウシガエル、ウシガエルのオタマジャクシ、スジエビ、ヤゴ、ヒメタニシ、ヒメモノアラガイ、ハブタエモノアラガイが混獲された。

5. 考察

2021 年 8 月までは個体数および平均頭胸甲長は減少していたものの、同年 9 月以降から、連続駆除装置 1 装置あたりの月別捕獲数、平均頭胸甲長が増加した。要因としては、繁殖による増加も考えられるが、付近のため池に、アメリカザリガニが多く生息しており、ため池の取水口に接する水路にアメリカザリガニが生息している点や、捕獲数および平均頭胸甲長が上昇している点から、外部からの侵入が考えられる。

在来水生水草であるヒシやエビモが、2020 年 6 月以降連続してみられていることから、捕食者であるアメリカザリガニの個体数は、減少していると考えられる。また、2022 年度の調査では、ヤゴが保護池内で多くみられるようになり、アメリカザリガニの駆除効果が表れている。

引用文献

- 1) 河村 功一. 2003. ニッポンバラタナゴ. 環境省自然環境局野生生物課 (編), pp. 44-45. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物- レッドデータブック- 4 汽水/ 淡水魚類. 自然環境研究センター, 東京.
- 2) 高橋清孝・長谷川政智・浅野功・芦澤功・安住芳郎・久保田龍二 (2017): 効果的なアメリカザリガニ駆除技術の開発 - トラップで低密度の実現 -. よみがえる魚たち (高橋清孝編著), 恒星社厚生閣, pp. 53-60.